

若年性認知症の人とともに地域で暮らす

～本人の強みやその人らしさを活かした支援のあり方～

2025年11月29日 世田谷区若年性認知症オンライン講演会

特定非営利活動法人 マイWay 渡辺 典子（川崎市 若年性認知症地域支援推進員）

- ◆運営母体：NPO法人 2012年法人認可
- ◆事業開始：2013年1月
- ◆所在地： 神奈川県川崎市高津区

## ＜障害者総合支援法に基づく福祉サービス事業＞

- ・就労継続支援B型事業 津田山
- ・就労継続支援B型事業 たかつ
- ・就労定着支援事業
- ・計画相談支援事業

## ＜川崎市委託事業＞

- ・若年性認知症支援コーディネーター事業
- ・若年性認知症社会参加体制整備モデル事業
- ・障害者相談支援センター事業

# はじめに

若年性認知症の人の多くは社会生活において現役世代のため、失職による経済的困難や日常生活でも工夫が必要になり、これまで家庭や社会で担ってきた役割をそのまま継続することが難しい人もいる。反面、「認知症であっても働きたい」「誰かの役に立ちたい」との思いは強く、活躍の場が求められている。

私たちは2013年、家族会から60歳になる男性を紹介されたことをきっかけに「就労継続支援B型」障害福祉サービスにて若年性認知症の人を受け入れ、ともに“はたらく場”として活動を開始。

現在は「若年性認知症支援コーディネーター」～「若年性認知症地域支援推進員」として、また『相談』＋『はたらく』＋『居場所』の機能を持つ認知症のある方のサードプレイスとしての役割を担っている。

# 川崎市の若年性認知症に関する相談体制

2020年 4月～2024年9月 若年性認知症支援コーディネーター 1ヶ所



2024年10月～

若年性認知症支援コーディネーター 2ヶ所  
若年性認知症地域支援推進員 1ヶ所

その他の相談窓口として

認知症疾患医療センター 4カ所  
認知症コールセンター ～サポートほっと～  
認知症訪問支援事業 など

神奈川県川崎市



厚生労働省の2018年度調査で、人口10万人あたりの若年性認知症の有病率は50.9人。川崎市では、約450人と推計される。

就労継続支援B型 定員10人（サードプレイス）／20人

## 「働きたい」を叶える場づくり

障害種別を問わず、一緒に働く仲間としての受け入れ  
認知症サポーター養成講座 開催→職員・利用者ともに学ぶ  
RUN伴（普及啓発イベント） 参加

社会人としての姿勢→学ぶ姿勢を生み出す  
忘れてしまうこと←躊躇なく伝える  
お互いに支え合う存在に

## 『働く』から『はたらく』へ

“はたらく” 定義の多様化

「お金を稼ぎたい」「社会と繋がっていたい」「誰かの役に立ちたい」

賃金追求だけではなく、誰もが関われる工夫  
本人の声とともに試行錯誤を重ねる

認知症になっても、ではなく、なったからこそできること  
感じること、やりたいこと

## 本人の声とともに “自家焙煎珈琲づくり”

自分たちで作り出す  
工程を細分化して、全員が参加できる工夫  
本人とともに考える  
どうすれば喜んでもらえるか  
仲間や地域とのつながり『出張カフェ』

認知症＝何かをしてもらわなきゃいけない立場ではない

そして今、



## 必要なこととは・・・

ご本人の思い・ご家族の思い  
マイWay以外の時間について  
相談できる場所・人の重要性

“働く” から “はたらく” へ

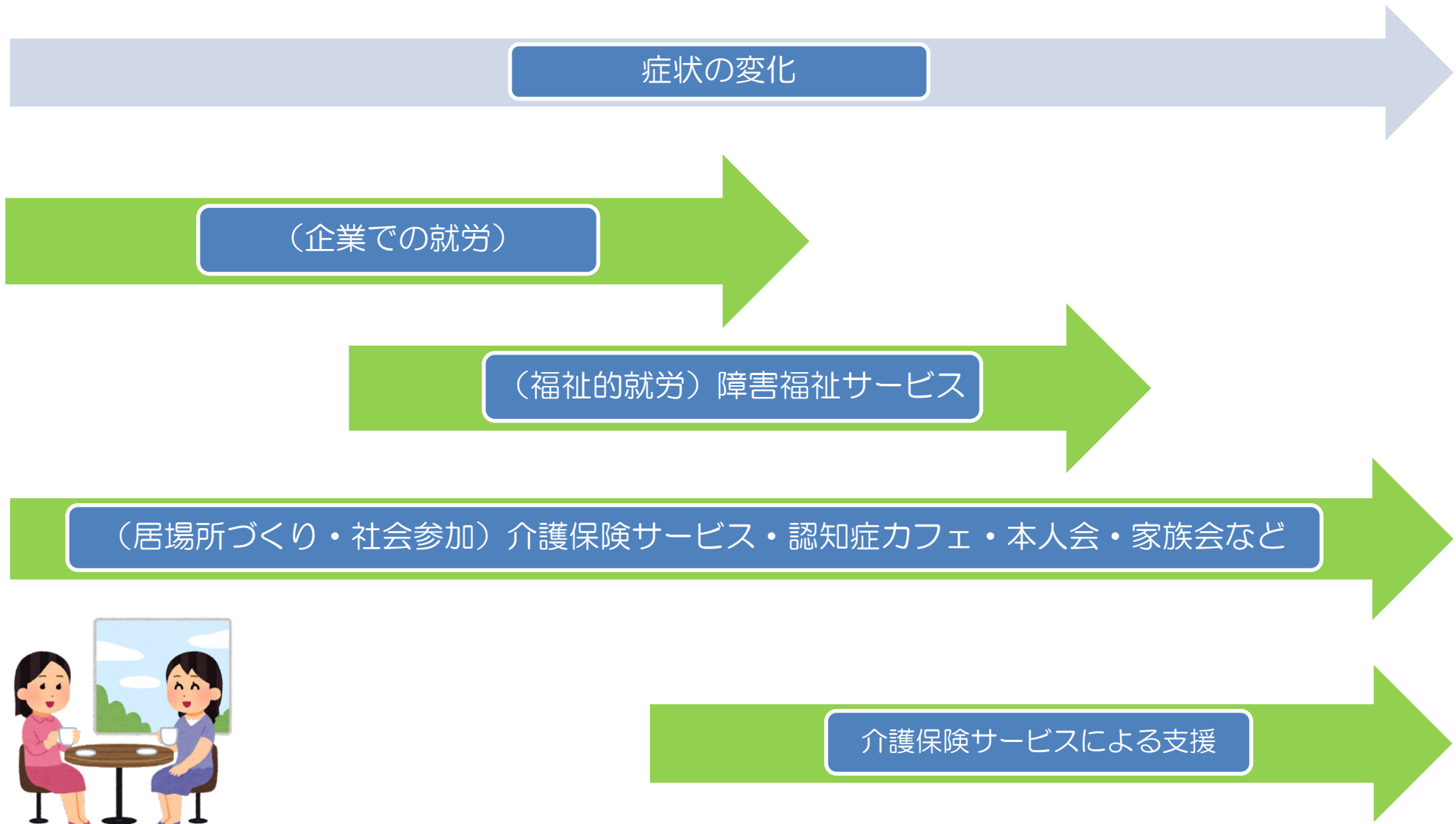
『はたらく』 『つどう』 『つながる』

自宅でも会社でもなく、

それぞれにとって自分らしくいられる **サードプレイス** へ



# 若年性認知症の人の就労・社会参加



## 診断後、休職中のAさん（58歳）の事例

メーカー勤務のAさんは1年ほど前から物忘れをすることがあり、仕事に影響が出ていた。会社から勧められ、受診をした結果「若年性アルツハイマー型認知症」と診断。会社からは休職扱いで1年半在籍を続けることが出来ると言われた。自宅に引きこもってしまった夫を心配した家族が相談。本人は面談の際に「働きたい。せっかくなら何か役に立つことがしたい」B型（サードプレイス）の活動に興味を持ち、現在は週5日の通所、週末は趣味の散歩などを続けている。

※休職中の場合、会社側の許可があれば就労継続支援サービスの利用は可能となる。

## 発症後、自宅に引きこもってしまったBさん（55歳）の事例

NGOを運営しながら、海外でも活動をしていたBさんだったが、発症後、活動を縮小して役割を失ったことで自宅に引きこもるようになってしまった。心配した夫が相談。何回かの見学や体験利用を経て、現在は週2日の利用を楽しみにしている。

「働く」というよりは「自分に何か出来ることがあれば嬉しい」今年はボランティア活動を復活させて、“誰かの役に立てる”ということを楽しみの1つにしようと話をしている。

※「働く＝賃金労働」ではなく、さまざまな「はたらきかた」を考えていくことが大切。

# 活動の様子





# 新しいチャレンジ



# 若年性認知症地域支援推進員として

## 若年性認知症本人のつどい『これから会議』

毎月1回、お茶会や“大人の社会科見学”などの外出イベントを本人らと一緒に企画している。

過去ばかりふりかえらず、今、そしてこれからどうする？  
メンバーさん同士でおしゃべりをしながら、一人ひとりの  
やりたいことを実現させていく会。

今年は“シェア畑”をスタート！！





## オンラインかぞくの会『ゆるるか』

毎月1回 オンライン（zoom）での開催。

参加者は、ご家族と支援者（オブザーバー）



コロナ禍で始めた「オンライン」今では毎月の楽しみになっている方も。毎回テーマを決めずに、その日に出た話題や相談ごとを、参加者で共有しながら話をしていく。遠方の家族が参加できることもメリット。時々のオフ会も楽しみの1つ。

## 本人と家族の一体型支援とは

家族を一つの単位として一体的に支援を行う。  
家族と本人が、話し合い思いを共有し、そして  
一緒に活動を楽しむこと。

他の家族との出会い、自然に関係性の在り方の  
気づきを得ることができる。

“高尾山ハイキング”  
“シェア畑”





## 本人の声とともに

認知症になってもわたしはわたし  
自分のやりたいことを、これからもやり続けたい

“認知症”を受け入れるには時間がかかった  
仲間の存在が心強かった、みんなスゲーな！  
予防？そりゃ、出来るならしたいよ  
なってしまった自分を否定できない  
ここに来なかったらどうしていただろう  
刺激や会話、少しの「～ねばならない」があるといい  
自分も誰かの・社会の役に立ちたい  
同じ状況の人に少しでも早く教えてあげたい



私たちの活動は、他分野との共生からスタートしています。「認知症」といえば“高齢者”や“介護”のイメージが先行している中、2013年に“障害福祉”の分野で始めました。「働きたい」という思いは障害のあるなしに関わらず、誰もがもつ権利としてあります。それでも、認知症のある方との協働は、チャレンジの連続でした。

そして、本人らが主体的に地域社会と繋がり続け、活動の中で自信や自分を取り戻していく姿をたくさん見てきました。

認知症のある人もない人も、ともに暮らしていくことを”あたりまえ”にしていきたい。そう願いながら、これからも活動を続けていきます。



ご清聴いただきありがとうございました